

歴史物語の方法論

— 連結作用概念と物語文 —

伊 賀 光 屋

I 歴史主義の展開

K.R.Popper (1957) は「歴史主義の貧困」のなかで、形而上学的な大きな物語、マルクスの史的唯物論、ヘーゲルの歴史哲学、そしてキリスト教の歴史神学などを歴史主義と呼んでいるが、一般には歴史主義とはこういった類のものを指してはいない。一般的にはヴィコやヘルダーらの反啓蒙的非合理主義、ランケの反普遍主義的個別主義、サヴィニーの歴史法学、ディルタイやマイネッケの生の哲学や個体神秘主義が歴史主義に含まれる。

H.Meyerhoff (1959) は歴史主義の特徴を①体系的アプローチの否定、②単一的解釈の否認、③歴史概念の歴史的可変性の主張、としている。歴史主義は現実を歴史としてみる見方である。すなわち、超歴史的あるいは超現実的な視点から真理を語るのをやめ、歴史を人間の出来事（自然ではなく文化）を記述することだと考える。構造的な分析を犠牲にして、偉大な人物の行動が生んだ過去の出来事そのものの感情移入的な模写を目指している。また歴史を民族に特異な一連の発展とみなしている。

F.Boasの反進化論的英雄史観やA.Kroeberの超個人的文化史観は唯史主義（historicism）と呼ばれることがある。一方で、近年のP. Laslett (1965) らの数量的歴史学やE. Le Roy Ladurie (1975) の事件構造史などは新しい歴史（histicism）と呼ばれる。

歴史主義の考え方の中では一回限り性と歴史性という考え方が重要である。歴史主義は歴史事象の一回限り性を強調する。W.Windelbandは歴史というのは、いかなる類型、いかなる法則によっても捉えることのできない個体の生命が何ものにも拘束されない精神の自由において発現する一回的なものであるとして、こうした精神は抽象的概念では捉えることはできず、同情や共感や感情移入によって捉えざるをえないとした。絶えず繰り返すこと（was immer ist）は普遍的法則によって説明されるが、一回限りしか起こらないこと（was einmal ist）はその個性性を歴史的に記述されねばならないというのだ。

また、歴史主義は歴史性を強調する。歴史性（Geschichtlichkeit, histicity）とはあらゆるものが歴史の産物であり、それが感覚的世界の中に織り込まれているということである。個々人は歴史的社会的現実の中で生まれ育ち、その文化的価値を吸収していく。この現実世界は時代とともに変化・発展しながら過去から継承され、後代へと伝承されていく。このように人間の生（Leben）の現実そのものが歴史的なものであり、個人は自身が歴史的的存在であるが故に歴史を理解しうる。ここで言われている「歴史的社会的現実」（die geschichtlichgesellschaftliche Wirklichkeit）とは、言語、教育制度、慣習、法律、経済、国家、道徳、宗教、芸術、科学といった文化的諸体系として現れる客観的精神（個人の主観的意識を包み込む普遍的共同意識）と家族、自治団体、教会、国家などの社会組織とが融合したものだと考えられている。

精神科学は理解がおよぶ限りの範囲を研究対象とするが、それは精神が創造した歴史的社会的現実他にない。つまり、人間と社会的現実の歴史性こそが解釈学の取り扱うべき主題とされた。こうして、歴史主義では歴史学を一つの精神科学とみなし、解釈学の方法論が採用されていく。

歴史主義は歴史家が歴史を研究するための方法論の中で最も重要なものとされてきたが、多様な意味内容

をもつ厄介な概念だと言われている。A.Munslow (2000) によれば歴史主義には次の三つの含意があると言われる。

- ① ほとんどの歴史家にとって、歴史主義とは歴史家によって押しつけられた観点ではなく、歴史的時代固有の観点から、その時代を捉えるという基本的な歴史的行為を意味している。すなわち当該時代の観点からその時代を捉える立場を意味する。
- ② 歴史主義は、それぞれの歴史的時代がそれ自身の標準をもち、それによって何が信用しうる知識で、何が保証された真実であるかが決まるということを受け入れる立場を意味している。すなわち当該時代の標準によって正しい知識や真実が決まると考える立場を意味する。
- ③ 歴史的変動過程には、包括的で論証しうる決定的なパターンがあると考えられる立場である。

F.Meinecke (1936) は歴史家は事件、人々の行為や思考を、それ自身の歴史的瞬間で理解すべきだと主張している。つまり、個々の出来事は起こったときにそれが実際に起こったように観察し報告すべきだといふのだ。これは文脈主義的あるいは「その時その場で」主義的な歴史主義で、現在の視点や歴史家のディエゲシスを最小にする観点に他ならない。W.Diltheyの自己移入 (Sichhineinversetzen) やR.G.Collingwoodの再遂行 (re-enactment) が文脈主義的歴史主義の方法である。再現論者こうした共感的プロセスに対しては異議を唱えるが、過去をありのままに捉えるようとする立場では一致している。そして、カバリング法則や社会理論に基づき歴史を説明しようとする構成主義とは対立する。

それぞれの歴史的時代はそれぞれの標準をもち、それによって何が信頼できる知識で何が立証しうる真理かを判断していると主張する意味での歴史主義は「相対主義」的色彩を帯びている。過去を判断するための普遍的で超越論的標準というものとは存在せず、全ての人、出来事そしてプロセスは歴史的に独自性をもっている。この含意では、「今この場で」の解釈を主張する言語論的決定論 (脱構築主義的物語論) と決定的に対立する。過去に生きた人々が抱いていた意味から、またその後の歴史家たちがそれに上塗りした解釈から、もし歴史家が証拠の本当の意味を区別しうるなら、言い換えると歴史家が証拠と解釈の間の解釈学的循環を破り、間テクスト性から抜け出すことができるなら、歴史主義の相対主義的含意は避けられるが、それができないならば相対主義からの逃れることは出来ない。

II 歴史観の変遷：再現論、構成主義、脱構築主義

(1) 再現論・構成主義・脱構築主義

歴史観は存在論の独立テーゼと認識論の知識テーゼによって類型化すれば、再現論 (reconstructionism)、構成主義 (constructionism)、脱構築主義 (deconstructionism) の三つに区分できる。再現論は過去は実在し、また絶対的に正しく認識できると考え、構成主義は過去は実在するが相対的にしか正しさを主張しえないと考え、脱構築主義は過去は実在せず書かれた歴史の中にしか存在せず、いずれの解釈も他の解釈を凌ぐことはできないと考える。

再現論は形而上学的実在論者や経験論者の歴史観で、G.R.Elton (1991) がその代表的論者といわれている。再現論者は比較、照合、文脈化、そして真純性の証明などの文献考証という経験的な方法を用いることで、過去についての事実に基づいた正しい知識が得られると考えている。過去はかつて実在し、それ故に証拠の中から事実を発掘して、実在に対応する知識を組み立てることで過去の真理に到達できると考えている。そして事実は虚構とはっきり区別でき、歴史家の視点から独立した真実を導き出さなければならないし、それは可能であると考えている。

構成主義は、書かれた歴史は過去の現実には当てはまっておらず、過去をそれが実際に起こったように再現することはできないと考えている。歴史家が記録を事実へと翻訳し、出来事に適切な解釈を加えることは困難なことであると考え。歴史家は過去の再現を試みても、実際には過去を構成しているが、記録の中に過去の声が残されていることも事実であると考えている。この構成主義にはアナール派、ロストウらの近代化論者、ホブズボームらのネオ・マルキスト、ベッカーらの実践的実在論者、そして歴史主義者である、リッカートやコリングウッドなどが含まれる。かれらは歴史とは歴史家が過去との対話に基づき証拠を概念的に捉え直す、いいかえると過去の人々の人生、決定、行為を形作る諸構造を社会経済的概念や文化的概念

を用いて理解しようとするものだと考えている。歴史は過去の痕跡を扱っており、間接的な仕方ではか過去というリアリティに接近できないので、その痕跡（証拠）から創造的にアブダクションやリトロダクションを用いてそれを再構成しているのだと考えている。

この構成主義が、言語論的転回以降、修辭的構成主義あるいは脱構築主義へと転換していった。修辭的構成主義とは、社会的世界の中で意味を構成するのは言語であり、歴史的研究対象は常に歴史家によって作り出されていて、全ての歴史的テキストは過去のリアリティではなく、過去を表現する歴史家による過去の構成の結果であるという言う考え方である。

脱構築主義は、解釈学が発見しうる諸々の意味といったものは存在せず、意味は他の意味との関係の中で決定されると考える。脱構築とはテキストの意味をもととの外在的なリアリティに言及することなく把握することを指している言葉であるが、脱構築主義の歴史観によると、解釈された歴史というものは実在した過去ではなく、それは書かれた歴史（言語）の中にのみ存在すると考える。歴史は過去を映す鏡ではないし、歴史家は自ら解釈的な歴史を物語ることで過去の歴史を構成するのでもなく、リアリティについての陳述をあたかも作り出しているかのように過去について語るように仕向けられていると考える。言語（カテゴリーや概念）は中立的な装置ではなく、すでにあるパースペクティブによって世界を分節化したものである。だから言語を使用する段階で既に歴史家は言語に沿った思考をし、言明し、陳述しているというのだ。M.Foucault, H.White, F.R.Ankersmit, A.Munslowらがその代表的論者といわれている。

A.Munslow（2000）によれば歴史とは史料に基づき過去の事実を伝えるだけでなく、特定の物語形式をかりて過去を創作することだという。そして、歴史は書かれた物語、すなわち歴史家の創作したテキストであるだけでなく、その物語が過去それ自体に対するモデルとなっているという。歴史は歴史家が物語り形式によって書くまでは、読者にとっては存在しない。歴史は人間の主体的行為や意図を物語という形式で解釈あるいは説明することである。つまり、歴史に固有の方法は物語である。歴史的变化は本質的に「ある出来事が起こり、次に別の出来事が起こった」という構造をもっていて、過去（の出来事や人々の意図的行為）は、物語形式という基本原理に従ってのみ理解しようという。歴史は文芸と異なり参照性（過去のある出来事を指し示しているということ）があり、過去そのものではないが過去について書かれている。歴史家は過去の出来事を叙述する際に、絶えず、どの出来事を取り上げ、それらの間にどんな関連性があり、それは歴史的にどんな意味をもったストーリーなのかを問い、それに答えなければならないという。

(2) 科学としての歴史から解釈としての歴史へ

日本史学では経験論者の方法論から構成主義者の方法論への転換が今進行中である。

今井登志喜（1953）は歴史学は経験科学であり、歴史研究法は一般科学の研究法以外のものではありえないとの立場から、歴史学は「人間の過去の社会的生活の変遷を研究する学問」であり、歴史学研究法は歴史の証拠物件たる史料に立脚して正しい歴史認識に到達する方法の全体であると言い、方法論の主要な部分は、史料学、史料批判、総合であるとする。

1. 史料学：史料の蒐集及び整理。史料には伝承と遺物がある。伝承には歴史画、地図などの形象的伝承、物語、伝説歌謡などの口頭的伝承、そして歴史的碑文、年表、系図、覚え書き、伝記、各種の歴史的記述などの文献的伝承がある。また遺物には考古学が発見する発掘物、建造物、公文書などの残留物と墓碑などの記念物とが含まれる。
2. 史料批判（考証）：
 - A. 外的批判
 - ① 真純性批判：偽作や改竄の発見
 - ② 来歴批判：史料の作られた日・時・作者の特定
 - ③ 本原性批判：異本の中から原本を特定する
 - B. 内的批判
 - ④ 可信性批判：陳述内容が正しいか否か、矛盾した諸陳述の真偽の判定
3. 総合

- ① 史料の解釈
 - イ) テキスト内解釈
 - ロ) 同一作成者による異テキスト間比較による解釈
 - ハ) 同一形式異作成者テキスト間比較による解釈
- ② 史実の決定
- ③ 歴史的連関の構成（歴史像の叙述）
- ④ 歴史的意義の把握（歴史的解釈）

成田龍一（2012）は構成主義の立場から、解釈主義的な歴史学方法論を展開する。

「歴史は出来事を選択して論ずる方法を探っています。歴史とは、ある解釈に基づいて出来事を選択し、さらにその出来事を意味づけて説明し、さらに叙述するということになります。本書ではこれを『歴史像』と呼んでいきます。」（ii 頁）

として、戦後近現代日本史の解釈パラダイムが遠山茂樹らの社会経済史パラダイムから鹿野政直らの民衆史パラダイムを経て、酒井直樹らが率いる社会史パラダイムへと展開してきたこと、そしてそれにつれて、女性やマイノリティの視座が強調され、日本史と世界史といった区分を否定しグローバル市民の視点が強調されるようになってきていると論ずる。

色川大吉（2006）も構成主義の立場に立っている。色川は歴史叙述にとりかかるには次の三段階を踏まなければならないという。

- ① 史実（歴史的事実）を事実（資料）の中から選び出す。歴史の真実を最もよく表現していると思われる資料が史料である。
- ② そして史料を加工する。歴史的事実を使って、それらを組み合わせ、組み立てて、一定の歴史像を構成する。資料は関連づけられてはじめて「史実」といえるものになる。つまり「史実」は事実と関連を含む。
- ③ 歴史像が構成されたら、それに従って叙述する。その際に、
 - Ⓐ 史実に全く無縁で無根拠のものは使わない、
 - Ⓑ 一つの事柄を扱う場合でも、全体性との関連性を見失ってはならない、
 - Ⓒ 表現にはテクニカルターム（たとえば莊園制、名主、寄生地主制、幕藩体制など）学会で実証され公認された内容をもつ概念を用いる。
 - Ⓓ 時代の枠を超えてはならない。

としている。

歴史学者ではなく哲学者の中には、脱構築主義の立場に立つ者もいる。野家啓一（2005）は次のように言う。

「実際に生じた出来事は物語行為を通じて人間の時間の中に組み込まれることによって歴史的出来事としての意味をもちうるのである。・・・『歴史』は人間の記憶に依拠して物語られる事柄のうちにしか存在しない。・・・脈絡を欠いた出来事は、歴史的出来事ではないのである。ある出来事は他の出来事との関連の中にしか存在しないのであり、『事実そのもの』を同定するためにも、われわれはコンテクストを必要とし、『物語文』を語らねばならないのである。

過去の出来事E1はその後に起こった出来事E2と新たな関係を取り結ぶことによって異なる観点から再記述され、新たな性質を身に帯びる。それゆえ物語文は、諸々の出来事の間を関係を繰り返して記述し直すことによって、われわれの歴史を幾重にも重層化して行く一種の『解釈装置』だということができる。いわゆる『歴史的事実』なるものは、絶えざる『解釈学的変形』の過程を通じて濾過され沈殿していった共同体の記憶のようなものである。・・・歴

史的記述とはまさに『過去の制作』にはかならないのである。」（9～13頁）

しかし、脱構築主義の歴史分析は「歴史（学）史」であって「歴史」そのものではない。歴史研究者はこうした歴史哲学とは違って、過去そのものを扱わなければならない。過去は物語の中にしか存在しないというのでは歴史は書けない。だから歴史家であるならば、経験主義的な立場か構成主義的な立場にしか立ちえない。historyはギリシャ語の *ιστορία* に由来し、元々は「探求して知り得たこと」という意味があると言われる。しかし、現在は一般的には「過去の出来事の流れ」とそれを書いた「歴史書」という二つの意味でhistoryという言葉は使われている。ここでは前者を「書かれる歴史」、後者を「書かれた歴史」と呼んでおこう。「書かれる歴史」にアプローチする方法としては、過去の経験的事実を説明する科学的歴史の方法と個々の出来事を特定の歴史観に基づいて解釈し編集する物語的歴史の方法があると言える。本稿では連結作用概念と物語文という二つの概念をてがかりにして後者の方法論について論じる。

Ⅲ 物語としての歴史：歴史をどう書くか？遡及話法とペルテナンス

(1) 物語としての歴史

A.Munslowによると歴史的物語とは、一見するとばらばらな諸々の出来事を、「その出来事が起こり次にあの出来事が起こった」というように理解しうる順序に並べる言説のことであるという。利用しうる史料の中から一つのストーリーをもつ物語を識別し、構成し、辿っていくことが歴史を物語として解釈することである。歴史的物語はすべて、過去の諸出来事を改造し、なぜそれらの出来事が起こったのかを説明するが、歴史家の抱いている諸出来事間の因果関係に影響を与える諸力についての仮定が上塗りされているというのだ。また、物語は個々の陳述（ダントーの物語文）の集積体であり、それらの陳述の総和以上の創発的な意味を生み出す解釈行為である。そして、個々の陳述は、証拠に照らして真あるいは偽と判定するが、全体としての物語は確実に正しいとも誤りとも言えないとA.Munslowは考えている。

また、L.Stone（1979）は物語を次のように定義する。

「ナラティヴとは素材を年代的に連続した秩序へと組み立てること、およびその内容をいくつかのわき筋（sub-plots）があるにもかかわらず、単一の貫した物語（story）へと絞り込むことを意味する。物語風の歴史（narrative history）が構造史（structural history）と異なるのは、一つには配列が分析的と言うよりも記述的であること、いま一つは状況（circumstances）よりも人（man）に焦点があてられていることである。それ故に、それは集合的で統計的なものよりも個別的で特殊なものを扱う。」（pp.3）

そして、最近の新しい歴史のなかにおける物語の復活の理由を三つ挙げている。

- ① 経済決定モデルへの幻滅
- ② イデオロギー的コミットメントの衰退
- ③ 量化的方法の限界の認識；歴史記述における量的な言及、たとえばなににの増加とか、なににより多くのといった言及について、従来では少数の証拠の例示で済まされたが、現在では統計的証拠が要求されるようになっている。

これらの手続きは説得力の向上に役立ったが、いくつかの限界や問題点が指摘されている。すなわち、

- a 歴史的データはコード化できない。
- b 資料のコード化には実際上多くの助手を必要とし、同一基準でコード化することは不可能である。
- c データの性格から採用しうる解析モデルの種類が限定されたり、存在する解析モデルにデータを当てはめざるを得ないことがある。またデータに最適の数量モデルが歴史的言語に翻訳不能であることもありうる。

こうした批判にそって、アリエス、ゼルディン、デリュモエらのマンタリテの研究では、物語を語ることに、すなわち目撃者や参加者の証言に基づく一つ以上の出来事についての詳細な状況のナレーションが、過

去の心性の外に現れた顕在を回復するひとつの方法として採用された。また、カルロ・ギンズブルグは歴史認識が本質的に徴候解読型パラダイム (un paradigma indiziario) に属しており、その叙述様式として物語がふさわしいとする。

P.Veyne (1971) も歴史を物語として捉える。

「歴史とは何か? …… 歴史は科学ではないし、諸科学をあまりあてにしないほうがよい。歴史は説明しないし、方法をもたない。 …… 資料からぬけだして総合に向かう段になると、ツキディデスからマックス・ウェーバーやマルク・ブロックにいたる歴史家たちは実際なにを作っているのか? …… さまざまな人間社会についての科学を作っているのだろうか? はるかにこれ以下である。 …… 歴史家達は人間をその演技者とするような本当にあった出来事を物語る。歴史は本当にあったロマンなのだ。 ……

歴史は出来事の物語 (レシ) である。あとのことは全部この事実からでてくる。歴史は即物語であるから、復元と言っても小説の域を超えない。 ……

歴史のナレーションは資料に基づくモンタージュ写真ではない。過去をまるでいあわせただかのようにじかに見せるわけでもない。G.ジュネットの便利な区分を用いると、それは物語 (ディエゲーシス) であって、模倣 (ミメシス) ではない。」

(訳書、1~10)

(2) 歴史物語の方法

P.Veyneは歴史の方法として

- ① 資料の解説
- ② 批判
- ③ 遡及話法

の三つを挙げる。そしてこのうち遡及話法が彼の物語法の中心的方法なのでとりあげてみよう。

「出来事はいつでも片べんたる間接的な印によって知られる。だから塞ぐべき穴が多々ある。それを塞ぐのが遡及話法である。 …… 一番簡単な歴史の命題から出発することしよう。ルイ14世が不人気になったのは、税金があまりに重すぎたからだ。歴史家が本領を発揮している場合にはこの種の文章は極めて異なる二つの意味を込めて書かれてきた可能性があることを知っておかなければならない。 …… 第一の意味において書かれた場合、この命題は次のような意味になる。資料を介して歴史家はまさに税金が王の不人気の原因であったことを知る。いわば彼は耳でそのことを聞いたのだ。第二の意味では、歴史家はたんに税金が重かったことと、また別の話して、王が治世の末期には不人気になってしまったことを知っているにすぎない。その場合、彼はこう仮定しているのである。またはそのことが明白だと思っているのである。すなわち、だれの頭にも思い付く、この不人気の説明は、税金の重さであると。第一のケースでは、歴史家は諸資料のなかに読みとったひとつの筋書きをわれわれに話してきかせる。税制が王を不人気にしてしまったというのである。第二のケースでは、彼は遡及話法をやっている。彼は不人気ということから遡って、当然予想される原因へ、説明力をもつ仮説へ行き着いている。」 (訳書262~265頁)

(3) 歴史的説明：物語による解釈

P.Veyneは歴史的解釈とは物語による解釈のことだと言っている。

「説明という言葉には、強い意味と弱い意味と二つある。強い意味では、説明するとは、ひとつの事実をその原理に帰属させること、またひとつの理論をもっと一般的な理論に帰属させることである。これは科学や哲学がやることだ。もうひとつは、通常よく使われる弱い意味で、次のようにわれわれが言う場合がそれにあたる。起こったことを説明させてください。そうすればあなたも納得されるでしょうから。 …… おなじみの説明、第二ジャンルの説明こそまぎれもなく本物の歴史的説明である。いやむしろ歴史的説明の唯一の形態である。 …… 歴史家の側からすれば、説明するとは筋書きの起承転結を示すこと、それを分からせることである。これが歴史の説明なのだ。 ……

我々はこの説明のために、理解という名詞をとっておくことにする。」(訳書164～165頁)

「歴史は科学ではないし、その説明のしかたは分かってもらうこと、どうして事態が起こったのかを物語ることである。」(訳書262頁)

Ⅳ ペルテナンスの基準として作用するもの：連結作用概念と物語上の実体

(1) 連結作用概念

歴史が物語の方法を採用して書かれるとき、どのようにして取り上げる出来事を決めるのか。一言で言えばテーマに関連のあると考えられる出来事を取り上げるのである。

歴史家が過去の出来事の中から何を選択し、どのように配列するのかを決める機能を果たするのがW.H.Walsh (1951)の連結作用概念(colligatory concept)やF.R.Ankersmit (1983)の「物語上の実体」(narrative substances)である。これらの概念は、物語実在論の立場からも物語観念論の立場からも述べられてきており、W.H.Walsh (1951)が前者の、そしてF.R.Ankersmit (1983)が後者の代表的論者であるといえる。

こうした考え方の嚆矢はW.Whewell (1858)だといわれる。かれは、経験的な諸々の観察結果を結合して理解しうる一つの全体とするためには、自然科学者がデータに概念や特定の視点を付け加える必要があると論じた。そしてこうした概念化(conceptualization)は法則的説明へ向かう研究プロセスの第一歩であると考えた。このように研究者が観察結果に与える関係性はデータに内在しているというよりは研究者が外からデータに対して与えたものと考えられていた。

W.Whewellの考え方を歴史哲学に導入し連結作用概念と言う名称を与えたのはW.H.Walshである。彼は、連結作用概念は歴史研究の三つの主要原理、すなわち

- ① 事実の中によく根拠づけられていなければならない、
- ② 事実を明らかにするのに役立たねばならない、
- ③ 具体的で且つ普遍的なものでなければならない、

という原理を満たす、観念あるいはテーマであると主張する。

そして、連結(colligation)とはある出来事の他の諸々の出来事との内的関係を辿り、それを歴史的文脈の中に位置づけて説明する手続きであるという。ここでは連結は、出来事間に内在する関係性である。つまり関係性は歴史の中に実在すると考えられていて、W.Whewellのように研究者が一連の出来事に与えた外在的関係性だと、つまり出来事間に実在するものではないと考えるのとは異なっている。F.R.Ankersmit流に表現すれば彼は物語実在論者ということになる。連結作用概念の具体的例としてW.H.Walshは「ルネッサンス」「啓蒙主義運動」「近代初頭ヨーロッパ資本主義」「教会の衰退」などを挙げる。これらの概念は多様な出来事や思想の中にある共通性を識別し、広範囲にわたる全く異なる諸現象を一つの公分母で括り、それらを全般的な解釈の中で連結させるものである。たとえば、「ルネッサンス」は1450～1600年の間のヨーロッパ社会における、絵画や彫刻に見られるある様式、この世界における人間の宿命についての特定の哲学、そして教養のある人なら知っておくべきとされていた事柄や政治についての特定の考え方などを、この時代の文化についての一貫した解釈のもとで、連結させているというのだ。F.R.Ankersmitによると、こうした概念は諸事実に基づいて作り出されたというよりも、混沌とした諸事実を明らかにするために作り出された概念だと言えるという。

その後何人かの歴史哲学者たちが連結作用概念について論じ、またそれに類した概念を編み出している。W.Dray (1959)は、連結とは諸々の行為や出来事の一つのパターンへと配列する付加的あるいは隠喩的一般化のことであり、それは法則的説明とは全く異なる歴史的説明の形式であると論じる。

L.Mink (1966,1970)は「概要についての見解」(synoptic judgement)という概念を用いる。これは、一連の起こった出来事の一つの統合的全体としてみなす研究プロセスにおける解釈過程であると共に、そうした理解を読者に伝えるための方法でもあるといわれる。後に包括的理解(comprehension)という用語を用いるようになるが、これは時空間的に隔たっていたり、論理的種類が異なっているために一緒に経験しえない諸出来事を単純な概念によって結合することである。この包括的理解には次の三つがあり、歴史家は配

列的な包括的理解を行うという。

- ① 理論的な包括的理解 (theoretical comprehension) : 一連の諸出来事がある一般法則から演繹される事例としてみなすこと。これは科学者の理解の仕方である。
- ② カテゴリー的な包括的理解 (categorical comprehension) : 我々が何かを理解するときに用いる先験的カテゴリーを識別すること。これは哲学者の理解の仕方である。
- ③ 配列的な包括的理解 (configurational comprehension) : 諸々の出来事を単一の具体的な諸関係の複合体の一部とみなすこと。これは歴史家の理解の仕方である。

C.Behan McCullagh (1978) は連結作用概念を①連結のための基準 (観念の共通性vs変化形態の共通性) と②一般性の度合い (一般的vs一回的) の二つの次元で区分し四つのタイプに分類している。

R.B.Shaw (2010) は登場人物 (例えばナポレオン), 理念型 (例えば資本主義), そして時代 (例えばフランス革命) の三つのタイプの連結作用概念を区別している。R.B.Shawによれば, 歴史家が時間に伴う変化, あるいは持続を表現するために用いる概念は時代 (periods) と事件 (events) であるという。歴史的時間を各時代に分けることを時代区分 (periodization) と呼ぶ。歴史についてのストーリーを語る, あるいは教える場合, 出来事 (occurrence) の塊を継起的に語るの, どのようにして諸々の出来事をいくつかの塊に区分するかを考えなければならない。これが歴史家の主要な使命であるという。さて, ここに, 出来事とは, あるテーマの例として集められた, 相互に関係づけられた事象のことで, 概念的共通性をもっている。そして, この出来事の集合を状況と呼んでいる。他方, 事件とはそれぞれが先行する出来事の結果として生じる出来事のことである。そして事件の連鎖は偶然の進行をし, ストーリーラインをもっているというのだ。

歴史主義 (歴史における人間活動の諸力についての一般的見解に代わって時代を個性化するものの発見を重視する立場) が時代区分をするときに用いた境界標識はもっぱら政治的事件であった。歴史主義の衰退と共に, 時代区分の標識として文化や社会組織の変化が取り上げられるようになってきている。事件は時代区分の基準となるが, 他方, 時代区分も次の二つの仕方で事件についての我々の理解を秩序づけるという。

- ① 時代区分は何らかの理念型を用いて, 事件とその参加者たちをカテゴリー化する。その理念型は検討している諸事件を比較検討するためのモデルとなる。
- ② 時代区分は, ある時代のストーリーラインを生み出す。そしてこのストーリーラインは, 理念型を参考として, 登場人物やタイプを結びつける筋 (plot) を含んでいる。例えば, 宗教改革 (the Reformation) というのは, 宗教的少数派と宗教的多数派 (理念型) 間の対立として, あるいはより特殊にはプロテスタンティズムとカソリシズム (登場人物) 間の対立として跡づけるストーリーラインの集合として考えることができるというのだ。

このように登場人物, 理念型, そして時代という連結作用概念を結合すると, ある特殊な諸事件の集合を調べるための足場が築かれるというのだ。

(2) 物語上の実体

F.R.Ankersmit (1983) は物語實在論 (narrative realism) と物語観念論 (narrative idealism) を区別し, 物語観念論の立場から, 物語上の実体を論じる。物語實在論とは, 歴史的な陳述によって言及されているものが言語外の実在に対応している場合にその陳述は真であり, 歴史物語の内容がそこで描かれている歴史的リアリティと対応している場合にその歴史物語は真であると考えた物語論のことである。物語實在論はいわゆる絵画理論を支持する。歴史的陳述や歴史物語が過去の事象やリアリティの対応していると考え場合に, 実際の過去を言語レベルに「写像」するための「翻訳規則」 (translation rules) が存在する。これまでに間主観的に受け入れうる翻訳規則とされたものは, ①本来の歴史主義者 (RickertやMeineckeら) の場合には「文化的価値」 (人間の作り出したものの価値の観点から歴史的個性の本質を選び叙述する), ②ポッパーの言う「歴史主義」の採用する社会科学の理論やモデル (モデルを構成する概念に当てはまる事象のみを取り上げる), ③H.Whiteの修辭的文彩 (隠喩, 換喩, 提喩, 反語など) を用いて歴史を書き換える) などがあるという。

それに対して, 物語観念論とは, 歴史家が書いた歴史は, 何を書き何を書かないかについての選択に基づ

いているので、歴史物語と歴史的リアリティとは対応していないと考える物語論である。物語観念論は絵画理論を拒否する。F.R.Ankersmitは絵画理論が用いる翻訳規則は恣意的な選択規則でしかないと主張する。そして、過去は翻訳規則を用いて歴史物語へと写像される風景のようなものではなく、歴史物語の中で歴史家によって構成されたものだと論じる。歴史物語の構造は、過去に加えられたあるいは押しつけられた構造であり、個々それ自体の中に客観的に存在する同類の構造の反映ではないというのだ。

言い換えると、過去それ自体は物語構造をもたず、物語構造は歴史物語の中でのみ生じる。過去と歴史物語とは構造的に異なっており、翻訳規則でこれらを結びつけることはできない。歴史家は「啓蒙主義運動」、「ルネッサンス」、「産業革命」といった概念を用いて過去を粉飾するというのだ。このように過去は、その一部を構成しているものではなかったり、実際の歴史的現象を指し示すものではない諸実体を用いて示される。こうした歴史的過去の諸出来事から一定の出来事を選び出す際のペルテナンスの基準となるものをF.R.Ankersmitは物語上の実体と呼んだ。物語上の実体は歴史家が歴史物語を構成する際の出来事を選ぶ選択の指針として機能するだけでなく、歴史的物語の内容や認知的中核を具体的に表現するものとしても機能している。そして、これをアリストテレスやライプニッツの「実体」概念を援用して、「物語上の実体」と呼んだのである。そして、何故連結作用概念という用語を用いなかったのかと言えば、それは過去の事物や側面、すなわち過去のリアリティを指し示すものとして考案された概念であるからだという。F.R.Ankersmitはそうした過去のリアリティに言及せず、過去の物語的解釈を指す用語として「物語上の実体」という用語を選んだのである。

物語観念論者の主張は次の三つのテーゼに要約しうる。

- ① 歴史物語は過去の「絵画」、すなわち過去をありのままに表現したものではない。
- ② 歴史物語において過去は過去の諸事物や諸側面に言及しない実体によって叙述される。この実体は過去についてのテーゼであり物語上の実体である。つまり歴史物語は実際の過去から自律している。
- ③ 歴史物語は隠喩と同じように実在を見るための視点を提示する。

そして、これら三つのテーゼ（反絵画説、自律説、視点提示説）は、いずれも歴史物語は過去の状態や事態についての個々の事実確認的（constative）な陳述から構成されていることを否定しない。問題は理想的編年史が確認しうる全ての出来事についての事実確認的な陳述集合の中から、ある歴史物語が選び出してくる陳述はその歴史物語の「物語上の実体」によって決められるということである。

V 物語文と歴史物語

(1) 歴史における説明（物語的論証）

テーマに沿って選ばれた諸々の出来事を関連づける作業は、歴史的説明、あるいは物語的論証とよばれる一種の解釈作業である。

歴史物語（narratio）は論証（argument）であり、諸々の出来事が因果的に関係づけられて、ある出来事が他の出来事によって因果的に説明されている論証であるといわれる。

M.White（1965）は実証主義的な立場から歴史における説明を考える。まず、年代記（chronicle）と歴史（history）を区別する。年代記は「何年に何が起こった」というような出来事や状態についての事実的な報告を年代順にするものであるという。一方、歴史は諸々の出来事や状態を因果的に結びつけて叙述したものであるという。そして歴史物語が真実であるならば、

- ① 歴史物語の中で言及される事実は正確に叙述され、
- ② よく確かめられている経験法則に基づいて、諸事実間に因果関係が存在することを論証しなければならない。年代記でも歴史でも、出来事や状態が、

$$a \rightarrow b \rightarrow c \rightarrow d \rightarrow \text{etc.} \cdots (1)$$

という時間的契機として叙述される。そして、aはAに、bはBに、cはCに、dはDに含まれる現象で、A,B,C,Dは現象をカテゴリー化した概念だとすると、(1)の背後には、たとえば、

$$A \rightarrow B, \quad B \rightarrow C, \quad C \rightarrow D$$

といった因果関係が暗に主張されているというのだ。

A.Danto (1965) は物語の論証が演繹的論証とは異なることを強調する。書かれた歴史はいかなるものであれ、次の三つの条件を満たさなければならない。

- ① 現実に関起った出来事を記録しなければならない。
- ② 出来事をそれらが起こった順序で記録するか、出来事がどういう順序で起こったかが分かるように記録しなければならない。
- ③ 何が起こったのかを説明しなければならない。

そして、A.Dantoは時代編年史と歴史とを区別する。時代編年史は「何年に何が起こった」ということを順次記録したもので、上記の三つの条件を満たしている。しかしそれだけでは歴史にはならない。歴史は有意義な物語でなければならないという。有意義性には、プラグマティックな有意義性、理論的な有意義性、結果的な有意義性、そして関連性による有意義性があるが、A.Dantoは出来事と出来事との関連性を立証することが歴史に求められる条件だという。

「時代編年史はおこったことの単なる説明で、それ以上の何物でもない。・・・事実完全な説明は、もしそれを言明することが可能だとすれば、時代編年史にすぎないであろう。・・・最高の時代編年史でさえ、いまだ本来の意味での歴史たりえず、たとえ完全な説明よりもはるかに少ない細部しか描かれていないものでも、本来の歴史となりうる。本来の歴史は時代編年史を準備運動とみなし、それ自身の責務は、時代編年史によって編まれ記録された事実にある意味を割り振ったり、またそこから意味をみわけたりすることにむしろ近い。・・・」(訳書、184頁)

「もとより理想編年史は完全である。・・・だが、これだけでは十分ではない。なぜならいかなる出来事についても、そこでその出来事が目撃されているのではないような一連の記述があるのであり、こうした記述は必然的に、しかも原則的に理想的編年史から除外されているからである。ひとつの出来事についての真実全体は、あとになってからしか、時にはその出来事が起こってからずっとあとにしかわからないし、物語のこの部分は、歴史のみが語りうるのである。」(訳書、184頁)

歴史のみが語りうる部分、すなわち出来事と出来事との関連性を叙述する、最小の単位をA.Dantoは物語文(narrative sentences)と呼んだ。歴史は相互に関連づけられた「物語文」の複合体であると考えられている。

物語文とは、二つの別個の時間的に離れた出来事E1とE2を指示し、そのうちより初期の出来事E₁を記述する文のことである。例えば「30年戦争は1618年に始まった」は物語文である。物語文は次のような説明構造をもっている。

- ① Xはt₁時点でFである。
- ② t₂時点でHが起こる。
- ③ Xはt₃時点でGである。

①と③はともに被説明項を構成し、②は説明項である。②を満たすことが、①—③の説明になる。しかし一方で、①は始め、②は中間、そして③は終わりという物語構造の形式をとっている。このように、歴史的説明とは物語の形式をとっているのだ。

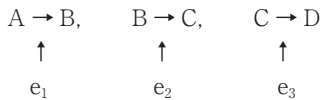
「物語は説明の形式である。・・・被説明項はたんに出来事を記述するのではなく、変化を記述する。・・・説明は、変化の時間の両端にまたがる中間部分を満たすということなのである。・・・物語とは、始めから終わりまでの変化がどのように起こったのかについての記述、言うなれば説明なのであり、始めと終わりはいずれも被説明項の一部なのである。」(訳書、281～282頁)

物語の論証と演繹的説明の共通点は、

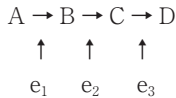
- ① 変化している事象は多少なりとも同一性を保っている。
- ② 結論に諸前提以上のことが含まれることを許さない。
- ③ 物語の論証や演繹的説明それ自体と無関係な前提は加えてもよい。

また、相違点は次のようなことである。

物語では、ある事象Sが一連の出来事 (e_1, e_2, e_3) によって状態を $A \rightarrow B$, $B \rightarrow C$, $C \rightarrow D$ へと変化させたという一連の分子的論証を考えると、その中の各単位



はそれぞれ、一般法則によってカバーされることが可能であるが、



全体をカバーする一般法則は歴史的事象では考えられない。つまり、 e_1 の次に e_2 が、そして e_2 の次に e_3 生じることは一般的ではなく、特定の地域の特定の時代にのみ存在した一回限りの組み合わせにすぎないといえる。

さらに、AがBの、BがCの、CがDの原因ではなく e_1 がBの、 e_2 がCの、 e_3 がDの原因であり、これらを含む一般法則も存在するとは考えられない。

(2) 物語原子と物語分子

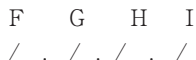
A.Dantoは歴史物語は多数の物語文が複合的に連結したものだと考えている。そして、その最小単位である物語文のことを物語原子 (atomic narrative) と名づけた。そして、先に述べた物語文の説明構造を次のような簡略的表現で表している。

- ① Fa
- ② y
- ③ Ga

ここでFaとGaは、ともにこの順序でのaの変化を示している。そしてこうしたaの変kを引き起こすと考えられるyが指示されると、一般法則が援用される変化についての仮説が立てられる。このようにして叙述された物語を物語原子と名づけ、



と図示した。ここで斜線は変化の末端を示し、点は変化の原因を示している。さて、こうした物語原子が多数結合して一連の変化を示す場合、それを物語分子 (molecular narrative) と名づけ、



と図示した。

A.Dantoの基本的立場は構成主義であり、歴史は現在の視点から構成され则认为ている。そして、次のように述べている。

「私たちが過去全体を目撃しえたとしても、私たちがそれについて与えるいかなる説明も、選択と強調と削除とを含み、関連性のためのある規準を前提としているということであり、またその結果私たちの説明は、もしそれが成功

することによって失敗しようなどと望まぬかぎり、すべての事柄を包摂することは不可能である。・・・歴史家の仕事は、・・・過去の模倣という理想を受け入れるが、たとえそれが過去や過去の一部についての完全な説明であっても、説明を与えること以上に歴史家が果たすべき目的があると主張しようとする。つまり仮に完全な説明をなし終えても、解釈という仕事はまだ残されている（という説があるが私はそれに反対する。）・・・歴史は一つであって、解釈を含まない純粋な記述はない」（訳書、140～141頁）

VI 隠喩的物語論批判

C.Lorenz（1998）はH.WhiteやF.R.Ankersmitの議論を隠喩的物語論と呼び経験論的実証主義の単なる裏返しであると批判する。

隠喩的物語論は、歴史家がテキストを生産するが故に歴史にはテキストの側面があるとする点では首肯しうるが、歴史とそのテキスト性を同一視した点が誤りであると指摘する。歴史は虚構的文芸作品とは異なり、常にテキスト外にある本当の過去についての叙述である。つまり、歴史的故事は参照的な性質を持っている。そして言葉を用いて事物を指示する行為は間主観的であるので、過去の物語を構成することは間主観的活動である。個々の陳述も、それらからなる全体としての物語も、その真偽の確定は可謬的な間主観的な取り決めに依存している。リアリティについての全ての言語的表現は、同時にリアリティについての視点を構成しているので、個々の陳述レベルでも、それらの諸陳述を編集した物語レベルでも、指示的で記述的なものを隠喩的なものや視点機能から切り離すことはできない。

フィクションと異なり、歴史は客体を扱い、その定義を巡って歴史家たちによる公開の論争に巻き込まれる。そして個々の陳述だけでなく、全体としての物語についても経験的および概念的の不十分性が批判される。

歴史家がただのストーリーではなく、本当のストーリーを呈示していること、そして歴史は真であることを主張している点でフィクションとは異なるということを隠喩的物語論者は考慮していない。このことは隠喩的物語論者が歴史研究抜きで歴史表現だけを分析することに由来している。

そして、言語使用に、指示的で記述的な文字どおりの言語使用と、非指示的で隠喩的で総称的な言語使用とがあると述べるが、歴史物語の構成を指示的で装飾的な隠喩表現と同一視していることが問題である。さらに筋立ては証拠という経験的制約を受けないので、歴史家は思いのままに歴史物語の筋立てをすることができると考えている。

こうした隠喩的物語論に代わるべき物語分析は、歴史研究の段階でもまた歴史を書く段階でも隠喩が入り込むことを認め、しかもその隠喩的陳述には正しいものもあれば、誤ったものもあることを認めなければならないとC.Lorenzは主張している。

我々はこの主張に大筋で賛成である。ただし、いくつかの点を加えておかなければならない。

「書かれる歴史」、すなわち本当の過去の歴史的過程は自存的で実在領域に属している。しかし、過去を説明したり解釈する行為やその結果である「書かれた歴史」は意存的で経験的領域に属している。

だから、「書かれる歴史」は構造に支配され、歴史家の認識からは独立して実在する。そして、史料と歴史的発展法則とを前提としてアブダクションで捉えられた構造的メカニズムについての諸概念（生産様式、社会構成体、世界システム）などの概念で説明しうる。

一方、「書かれた歴史」は歴史家の歴史観（認識）に左右され相対的な真理しかもちえない。そして「ルネッサンス」「産業革命」「冷戦」などの連結作用概念で物語られる。

『歴史上の実体』が「書かれた歴史」の本質であるという隠喩的物語論者の主張は正しいと言える。しかしそれは「書かれる歴史」の本質ではない。

参考文献

Ankersmit, F.R., 1983, *Narrative Logic : A Semantic Analysis of the Historian's Language*, Hague: Martinus Nijhoff Publishers

- , 1994, *History and Tropology: The Rise and Fall of Metaphor*, University of California Press, Berkeley
- , 1998, "Danto on Representation, Identity, and Indiscernibles," *History and Theory*, 37 (4) :44-70
- Auden, W.H., 1969, "Colligation and the Writing of History", *The Monist*, 53 (1) :40-57
- Collingwood, R.G., 2005, *The Idea of History*, Oxford University Press, Oxford, 小松・三浦訳「歴史の観念」紀伊国屋書店
- Danto, A.C., 1953, "Mere Chronicle and History Proper", *Journal of Philosophy*, 50 (6) :173-182
- , 1965, *Analytical Philosophy of History*, The Cambridge University Press. 河本英夫 訳「物語としての歴史—歴史の分析哲学—」国文社
- Dietl, P.J., 1968, "Deduction and Historical Explanation", *History and Theory*, 7 (2) :167-188
- Dilthey, W., 1914, *Gesammelte Schriften*, Bd. I, Stuttgart, 山本英一・上田武訳1981, 「精神科学序説：社会と歴史の研究にたいする一つの基礎づけの試み」以文社
- , 1946, *Die Philosophie des Lebens. Eine Auswahl aus seinen Schriften 1867-1910*, hrsg. von Herman Nohl, Vittorio Klostermann, 久野昭監訳「生の哲学」, 1987, 以文社
- , 1957, *Gesammelte Schriften*, Bd. V, Stuttgart, 317-331, 久野昭訳, 1973, 「解釈学の成立」以文社
- Dray, W.H., 1959, "Explaining What' in History" in P. Gardiner, eds., *Theories of history* Glencoe, Illinois: The Free Press,
- Elton, G.R., 1991, *Return to Essentials: Some Reflections on the Present State of Historical Study*, Cambridge University Press, Cambridge
- Heussi, K., 1932, *Die Krisis des Historismus*, Tübingen, Mohr
- Icke, P., 2010, "Frank Ankersmit's *narrative substance*: A legacy to historians," *Rethinking History*, 14 (4) : 551-567
- 石井寛治・原朗・武田晴人編『日本経済史 6 日本経済史研究入門』東京大学出版会
- 色川大吉, 2006, 『歴史の方法』洋泉社
- 喜安朗・成田龍一・岩崎稔, 2012, 『立ちすくむ歴史』せりか書房
- 小谷汪之, 1985, 『歴史の方法について』東京大学出版会
- Laslett, P., 1965, *The World We Have Lost: England Before the Industrial Age*, London, Routledge, 川北他訳『われら失ひし世界：近代イギリス社会史』三嶺書房, 1986
- Lakoff, G., & M. Johnson, 1980, *Metaphors We Live By*, The University of Chicago, 渡部昇一他訳『レトリックと人生』大修館書店
- Lorenz, C., 1998, "Can Histories be True? Narrativism, Positivism, and the "Metaphorical Turn" " *History and Theory*, 37 (3) :309-329
- , 2000, "Some Afterthoughts on Culture and Explanation in Historical Inquiry", *History and Theory*, 39 (3) :348-363
- Le Roy Ladurie, E., 1975, *Montaillou, village occitan*, Paris, Gallimard, 井上訳『モンタイユー：ピレネーの村 1294～1324』刀水書房, 1990
- Mandelbaum, M., 1961, "Historical Explanation: The Problem of 'Covering Laws' ", *History and Theory*, 1 (3) :229-242
- Meinecke, F., 1936, *Die Entstehung des Historismus*, München, R. Oldenbourg, 麻生訳『歴史主義の成立』筑摩書房, 1968
- Meyerhoff, H., (eds.), 1959, *The Philosophy of History in Our Time*, Garden City, New York, Doubleday & Company, Inc.,
- McCullagh, C.B., 1978, "Colligation and Classification in History," *History and Theory* 17 (3) : 267-284
- Mink, L.O., 1966, "The Autonomy of Historical Understanding," *History and Theory* 5 (1) :24-47
- , 1970, "History and Fiction as Modes of Comprehension," *New Literary History* 1 (3) :
- 宮地正人, 2010, 『通史の方法』名著刊行会

- Munslow,A., 1997, *Deconstructing History*, Routledge, London
- , 2000, *The Routledge Companion to Historical Studies*, London, Routledge
- 成田龍一, 2006, 『歴史のポジショナリティー—歴史叙述とその周辺—』 校倉書房
- , 2012, 『近現代日本史と歴史学—書き替えられてきた過去—』 中央公論社
- 西成田豊, 2007, 『近代日本労働史』 有斐閣
- 二宮宏之, 2011, 『二宮宏之著作集—全体を見る目と歴史学—』 岩波書店
- 野家啓一, 2005, 『物語の哲学』 岩波書店
- 大島真理夫, 2009, 『土地希少化と勤勉革命の比較史』 ミネルヴァ書房
- Popper,K.R., 1957, *The Poverty of Historicism*, London, Routledge & Kegan Paul, 久野収訳『歴史主義の貧困—社会科学の方法と実践』 中央公論新社, 1984
- 歴史学研究会編, 2002, 『歴史学における方法的転回』 青木書店
- Roberts,G., 2001, *The History and Narrative Reader*, Routledge, London
- Shaw,R.B., 2010, *Event and Periods as Concepts for Organizing Historical Knowledge*, PhD thesis, University of California, Berkeley (2010)
- Stone,L., 1979, "The Revival of Narrative: Reflections on a New Old History," *Past and Present*, 85(3) :3-24.
- 高村直助, 1980, 『日本資本主義論』 ミネルヴァ書房
- , 1992, 『企業勃興—日本資本主義の形成—』 ミネルヴァ書房
- , 1997, 『明治の産業発展と社会資本』 ミネルヴァ書房
- Veyne,P.,1971, *COMMENT ON ÉCRIT L'HISTOIRE*, Éditions du Seuil, Paris 大津真作訳『歴史をどう書くか』 法政大学出版局
- Walsh,W.H., 1951, *An Introduction to Philosophy of History* London: Hutchinson
- , 1967, "Colligatory concepts in history," in W.H.Burston & D.Thompson eds., *Studies in the nature and teaching of history*, London
- Whewell,W., 1858, *Novum Organon Renovatum*, 3rd ed. London: J.W.Parker & Son
- White,H., 1973, *Metahistory: The Historical Imagination in Nineteenth-Century Europe*, The Johns Hopkins University Press, Baltimore
- , 1984, "The Question of Narrative in Contemporary Historical Theory," *History and Theory*,23(3) : 1-33
- , 1987, *The Content of the Form: Narrative Discourse and Historical Representation*, The Johns Hopkins University Press, Baltimore
- White,M., 1965, *Foundations of historical knowledge*, New York
- Windelband, W., 1904, *Geschichte und Naturwissenschaft*, Straßburg: Heitz
- , 1980, "History and Natural Science," *History and Theory*,19(2) :165-185
- 財団法人史学会編, 2004, 『歴史学の最前線』 東京大学出版会